

すきぐし 梳櫛の部品

■ 出土地：東村跡、渡地村跡、首里城跡御内原北・東地区、首里城跡継世門北地区

梳櫛とは非常に目の細かい櫛で、当時の人は髪の毛の汚れを落とすために使っていたと考えられます。

今回紹介する梳櫛の部品は、牛の肋骨で作られており、今帰仁城跡や勝連城跡、首里城跡、渡地村跡などグスク時代～近世の遺跡から出土し、宮古・八重山地域でも確認されています。

当初、この製品は「ヘラ状骨製品」と言われ裁縫道具と考えられていました。しかし、大分県の町屋跡の発掘調査で両歯の櫛（唐櫛）が出土しており、それをよく見ると、県内で出土するヘラ状骨製品と全く同じものが使用されていることが分かりました。

県内で出土するヘラ状骨製品の形状は薄く、かまぼこ状と短冊状のものがあり、上下の両端は薄くなるように削られています。中央には組み立てた際の**びょう**（鉸）が残っているものや、鉸の孔が空いていないものなどがあります。この孔が開いていない製品があることから、梳櫛の部品として琉球へもたらされた可能性や、部品の製作から組み立てまでの全工程を琉球で行っていた可能性などが考えられます。

〈玉城 綾〉